



## 社会から得た利益を社会へ還元「クレジット」の生みの親

青井 忠治 (1904~1975)

青井忠治は、明治37年（1904）射水郡小杉町戸破（現射水市戸破）に、青井伊八郎とうたの長男として生まれた。青井家は、江戸時代に「伊勢領屋」を名乗る旧家であった。忠治1歳の時、父の破産が原因で両親が離婚した。2歳の時はしかに罹り左目を失明した忠治は、10歳の時に再婚した母を、翌年には父を44歳の若さで亡くし、不運な幼少年期を送った。それでも、祖母はると従姉はるえの励ましを受け、大正7年（1918）富山県立工芸学校（現県立高岡工芸高等学校）木工科に進学した。

当時から木工そのものには関心がなく、販売や経営に心が向いていた。1年生の時に伊藤宣良校長から聞いた、アメリカの鉄鋼王カーネギーの努力や苦勞、財団設立の話は、忠治の心に深く刻まれた。さらに、伊藤校長は「自分の仕事に打ち込むことが周囲の人々を助け、やがては自分のこととして必ず報われる」と説き、黒板に「すべて汝がことなれ」と書いた。忠治には、まるで自分のことが話されているかのように感じられ、処世訓としてこの言葉を生涯忘れず、苦しい時にはこれを思い出して頑張った。

大正11年（1922）3月工芸学校を卒業した忠治は、学校の先輩の紹介で東京芝の家具の月賦販売「丸二商会」に入社した。懸命の努力を続け、4年で最高幹部の一人となり、やがて、貯めた1万1千円（当時の大卒初任給が70~80円）をもとに、昭和6年（1931）2月東京中野に、暖簾分けのかたちで「丸二商会中野店」を開店した。顧客に喜ばれ支持されるように、自ら店員教育を行い、宣伝や広告に力を入れ徐々に売り上げを伸ばした。扱う商品を家具を中心にしたものから注文服、靴へと広げ、良品を大量に仕入れてコストを抑え、安く提供した。それまでの月賦販売に対する悪評を拭い去りたい一心からであった。昭和10年（1935）阿佐ヶ谷に出店し、同時に「丸二」の「丸」に「青井」の「井」を合わせて、「丸井」と改称し、2年後には株式会社化（資本金5万円）した。昭和16年（1941）戦時体制下により、全5店舗の一時閉鎖を余儀なくされた。終戦を迎えると、疎開先の長野県伊那から、早速上京して中野に仮店舗を設け、家具の現金販売で営業を再開した。5年後月賦販売を再開し、昭和35年（1960）には、「月賦」を「クレジット」と言い換えて、日本で最初のクレジットカードを発行した。

「景気は自らつくるもの」という商売哲学の下、昭和40年（1965）に東証一部に昇格し、5年後には月賦百貨店業界のトップ企業に育て上げた。昭和47年（1972）社長を長男忠雄に譲り、会長に就任した。

事業への飽くなき挑戦の一方、忠治は郷土に熱い思いを抱き、昭和38年（1963）母校高岡工芸高等学校に青井記念館・青井文庫を、昭和42年（1967）富山市にアオイ（青井）スポーツハウスを寄贈した。さらに、昭和48年（1973）私財10億円を基金とする「青井奨学会」を設立した。これらの根底には、“一生をかけて得られた私財を惜しみなく社会へ還元する”という崇高な理念が流れている。昭和50年（1975）8月18日逝去、享年71歳であった。

平成6年（1994）青井記念館が現在地に移転新築されたのを機に発足した青井中美展は、今年度第23回を迎え、受け継がれた忠治の志が若き中学生の創作意欲を喚起している。

## 平成28年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



### 小杉左官の名工（鏝絵）

竹内 源三 (1886~1942)

江戸時代後期の文政年間に活躍した左官職人の五代目、竹内勘吉の五男として、明治19年（1886）、現在の射水市三ヶに生まれた。小学校卒業と同時に左官職人となると、若い頃から才能を発揮し、明治44年（1911）には、25歳で射水郡役所から「一級漆喰（しっくい）彫刻士」として認定された。大正5年（1916）、竹内組を引き継ぎ、県西部を中心に、寺社・土蔵・銀行・公共建築を手掛けた。

源造は、寺社の装飾物の図解や和風の人物画等を参考に、鏝（こて）絵を製作した。「絵」というよりも「彫刻」に近い立体的な造形で、技術的にも優れ、斬新な発想に富んだ作品を多く残している。